



物

語

の

王

国



竹田真砂子
雪の降る音



の降る音

竹田真砂子

物語の王国
雪の降る音

一九九一年二月二〇日印刷
一九九一年三月一〇日発行

著者 © 竹田真砂子

発行者 藤原一晃

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二

電話 営業部〇三三(元)七八二一

編集部〇三三(元)七八二一

振替 東京九一三三二二

郵便番号一〇一

著者略歴
東京・神楽坂生
法政大学卒
「十六夜に」にて第六一回オール讀物新人賞
主要著書
「鏡花幻想」
「信玄公」思女の事につき」他

理想社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-04560-7

Printed in Japan

雪の降る音

装帧
||
公司
修

プロローグ

暖房のききすぎた館内から外へ出ると、いきなり師走の風が吹きつけてきた。

美恵子は、コートの襟元を押さえた。

風邪をこじらせるのが怖い。リサイタルまで、あと四日である。

——大事にしくちや。

チケットはほとんど捌けていた。二年ぶりのリサイタルでもあり、絶好の体調でステージに立ち、納得のいく演奏をしたかった。ピアノは、弾き手の好、不調を敏感に感じとってしまう。

——今夜は早く寝よう。

四丁目の角の大時計は、五時五分前だった。

十二月といえばジングルベルという、一時の風潮は影をひそめて、東京・銀座では、音楽だのアナウンスだのと、むやみにスピーカーから音を吐き出すようなことはないが、道路を埋め尽くした人と自動車くるまの、息吹きと動きが巨大な響きとなって、街全体を覆っていた。

デパートの正面玄関に、大きなクリスマスツリーが飾ってある。極彩色の、沢山の電球が、ついたり消えたり、そのまたたきが、年末の気忙きせわしさを、一層盛り上げていた。

渋滞で身動きもならず、道幅いっぱい列を作っている自動車くるまを、歩道の人波が追いついて行く。

雑踏の中の人びとは、前を歩く人の背に、つかず離れず、一定のリズムを保って進んでいる。歩道は、一方とその逆と、二筋の流れとなって、整然と動いていた。

美恵子も、その流れに逆らうことなく、銀座七丁目から四丁目に向かって、他の人びとと同じリズムで足を運ぶ。ストレートの髪の毛が肩の辺りで、歩調と同じリズムを刻んでいた。

——汽笛だわ。

突然、美恵子は足を止めた。

後から歩いて来た若い男が、美恵子の背中に突き当たってから、体を斜めにして追いついて行った。

次から次へ流れてくる人の波が、立ち止まっている美恵子をよけて左右に分かれる。

「おっとっと」

「いやあねえ、邪魔ねえ」

美恵子の耳元を、いろいろな声が過ぎ^よって行った。雑踏の中で立ち止まる人間がいたら、流れのリズムが狂うのである。

——来たわ。SL。まだ遠くね。

再び美恵子は歩き出した。

一度狂ったリズムはなかなか元に戻らない。足を踏み出す度に、美恵子は、誰かにぶつかった。

——皇居の向こう。あつ、お堀を越えたわ。

蒸氣機関車が近付いて来る。

汽笛の他に、地響きも伝わって来た。

交差点の信号が赤になった。人の流れが止まった。

——S Lの通過待ち。

美恵子も、無数の人の中に埋もれて、蒸氣機関車が通り過ぎるのを待った。

不愉快だが仕方がない。

——こんな所をS Lが通りさえしなければ、自動車の渋滞も、歩道が赤信号待ちの人間で溢れることもないのに。

それでも、蒸氣機関車は銀座の真ん中を通って行き、人びとは、その通過を黙って見逃している。それが社会の秩序というものなら、美恵子だって、おとなしく従うより他に手はないのである。

——来た来た。日比谷を過ぎた。

蒸気を吐く音、車輪の廻る音も聞こえる。街のざわめきは、蒸氣機関車の激しい地響きに、全部かき消されてしまった。

有楽町、数寄屋橋。機関車の黒い巨体が、銀座四丁目の交差点に現われた。

つむじ風が起こる。コートの裾がひるがえった。隣に立っていた若い女性の、長い髪の毛が、空中に舞い上がっている。

書類だろうか、おびただしい数の紙が宙に舞って、そして、どこかへ飛んでいった。機関車の煙突から白い煙が出ている。直径一メートルはありそうな大きな煙突の、そのままの太さで、密度の濃い煙があとからあとから、際限もなく吐き出され、後続の黒い車体を包んでいく。

地面がゆれた。美恵子は必死で足を踏んばった。

響音を轟かせて、今、美恵子の目の前を、蒸気機関車が通過する。

この先は、築地、月島……。

音が遠ざかっていく。

汽笛の声。

信号が変わった。人波がまた動き始めた。

美恵子だけが、まだ立ち止まっていた。

立ち止まったまま、人波にもまれながら、美恵子は、しだいしだいに遠ざかっていく汽笛に、耳を傾けていた。

第一幕

「お断りできないの？」

家を出る時、玄関先で母がいった。

「そんな勝手なこと、できないわ」

半年前から美恵子は、大手の楽器メーカーが主催する、音楽講座の講師を務めていた。

パリ音楽院に給費留学し、国際コンクールでの入賞も果たしているピアニストとしての実績が評価されたものらしい。

音楽大学の常勤講師をしている上に、演奏活動にも力を入れているので、時間的な余裕はなかったが、この要請を、美恵子は喜んで引き受けた。

美恵子が受け持つのはピアノ部門で、講座名は「ピアノの歴史」。

美恵子は、自分の専門科目である、スラヴ系の音楽を中心にして、講義を進めていた。

聴講生は大体、四十代から六十代の主婦層だが、時どき、白髪の紳士がまじっていることもある。聴いているのか、いないのか、理解してくれたのか、そうでないのか、壇上から、一方的に話し続ける美恵子は、姿勢正しく、黙って座っている聴講生を前にして、不安になることもあった。

「技術を重視するあまり、曲の持つ詩情を失ってしまうことがある。逆に、詩情に走りすぎて技術が疎かになる場合。これは論外ですね。ピアノという素晴らしい楽器があって、その楽器で表現するように書かれている曲なのですから、ピアノを最大限に活用する技術を、まず持っていなければ、曲の表現なんて、できません」

講師の声が一区切りする度に頷く人がいるが、あれは、他の聴講生は別として私だけ、あなたの説を理解している、という意味表示だろう。いずれにしろ、特にピアノの歴史に興味があるわけでもなく、美恵子の講義に耳を傾けようというわけでもな

い、教養講座に出席することだけが、目的の人びとなのである。

「あなたの勉強にはならないと思うけれど」

この種の講座を、美恵子が受け持つことに母は反対だった。音楽に格別の熱意を持っていない人びとに、音楽の話をして無駄なだけ。そのエネルギーを全部、演奏活動に注げという。

「そうでもないわ。人前で話すってことが、そもそも勉強なのよ。自分の考えがまとまるし。相手に熱意があるか、ないか。そんなことは別問題だわ」

聴講生は常時百人くらい。その中で一人でも、本気で講義を受けている人がいればいい、と美恵子は思っている。どんな場所にも、必ず本気の人が一人はいるもので、その一人のために、講師の方も本気で、講義の下準備をしていくのである。

「演奏家には、理論武装が必要なの」

音楽について、特別のレッスンを受けたわけでもない母に、理屈をいっても始まらないが、演奏活動だけがピアニストのすべてだと思いいこんでいるところは、なんとか正さなければならない。

母は一年中、ほとんど和服で通っていた。最近、ごく暑い間だけ、母自身がいうところの洋装をするようになっていたが。

何代か前に白人の血が混じっている、という家系のせいか、大柄で、瞳の色も少し茶がかっているのがかえって洋装を拒否する原因らしい。太平洋戦争の時は、いち早く、家族中がもんぺ姿になった、といっていた。

西洋かぶれというだけで白眼視される戦時。容姿に西洋風が漂う家族ともなれば、世間からスパイ扱いされかねない時代であった。現在も、母が和服を愛用しているのは、そんな過去が尾を引いているのかもしれない。だから母は、お琴のお稽古には通ったが、ピアノは習わせてもらえなかったそう。

「なにをするのも、あなたの勝手ですけれどね。弱虫なのだから、自重してちょうだい。熱でも出したらどうするの」

母の心配も無理ではない。美恵子は、いたって体が弱いのである。

「へんなところがお父様似なんだから」

二人きょうだいのうち、兄は母親似、妹の美恵子は外見も体質も父親の影響が強い。骨細で、切れ長の目で、気管支の弱いところまで、父の血統を引いていた。

美恵子が二十二の時他界した父の、直接の死因は肺炎だった。

「だいじょうぶ。気をつけるわ」

心配する母を勇気づけてはいたが、美恵子にも、自分の体調への不信は、もちろん母以上にあった。ただ風邪気味というだけでなく、昨夕から少し頭痛もする。

——気にしない、気にしない。

リサイタル一カ月くらい前から、気が張りつめてきて、一週間前になると、その度合いが極端に強くなる。

眠れない、食べられない。些細なことに腹をたてたり、涙ぐんだり。あまりの異常な症状に、知り合いの神経科医に相談したこともあったが、

「繊細さこそ、芸術家の宝物じゃないか」

逆に、緊張を奨励されてしまった。

以来、緊張を恐れないことにしているが、リサイタルを開くのは七回目、というの

に、今回もやはり、神経が極端に逆立っている。

昨夕からの頭痛も風邪ではなく、たぶん、緊張から来るものだろう。緊張が原因ならば、リサイタル当日には治る。ステージに上り、ピアノと相對すると、なぜか、それまでの緊張が嘘のように、気分が落ち着き、肩の力が抜けてくるのである。

——あと四日の辛抱。

鎮痛剤はいけない。第一に胃を悪くするし、眠くなる。なにより困るのは、覇氣をなくしてしまうことで、鎮痛剤を飲むくらいなら、痛みを堪えてステージに立った方が、ずっといい結果が出るようだった。

——緊張を楽しみましょう。

開き直る術を身につけよう、と心がけるようになっていた。

「講義している間は、それに集中して、リサイタルの緊張から解放されるの。結構、気分転換の役に立っているのよ」

母を説得して、美恵子は、家を出た。

話の一区切り一区切りに頷く聴講生というのも、よく考えれば、あれは講師への思